

近代日本文学評論史

土方定一

本文学評論史

土方 定一

法政大学出版局刊

著者紹介

土方定一 (ひじかた ていいち)

昭和37年、岐阜県大垣市に生まれる。昭和5年、東京大学文学部美学美術史学科卒業。同年、ドイツに留学。後、北京郊外、華北総合調査研究所研究員。戦後、千葉工業大学教授を経て、現在、神奈川県立(鎌倉)近代美術館館長。美術館活動に対して、ノルウェー・聖オラフ騎士十字一等勲章、菊地寛賞を受賞。

主要著書に『近代日本文学評論史』『近代日本洋画史』『岸田劉生』『ヨーロッパの現代美術』『世界美術館めぐり』『造型の心理』『近代日本の画家たち』『ブリュッゲル』(毎日出版文化賞受賞)、『画家と画商と蒐集家』『日本の近代美術』『ドイツ・ルネッサンスの画家たち』(芸術選奨・文部大臣賞受賞)、『大正・昭和の画家たち』『レンブラント』『パウル・クレーの造型思考』(共訳)、その他がある。

近代日本文学評論史

1973年11月25日

初版第1刷発行

著 者 土 方 定 一



発行所 財団法人 法政大学出版局

〒106/東京都港区南麻布2-8-4
電話 453-0717/振替・東京95814
印刷・三和印刷/製本・鈴木製本所

定価はカバーに表示してあります

© 1973. Teiichi Hijikata

1391-92001-7710

目次

I 明治文学評論史

はしがき

坪内逍遙の『小説神髓』とその周囲

森鷗外Ⅱ 烏有先生と没理想をめぐる論争

北村透谷と勃興する階級の浪漫主義

高山樗牛と支配する階級の浪漫主義、田岡嶺雲

自然主義文学評論

移行

Ⅱ 白樺とその文化史的意義

武者小路実篤論

印象派の移植と「白樺」

1

2

5

12

17

22

27

38

41

42

51

Ⅲ 明治美学史考

森鷗外と明治美学史

森鷗外と原田直二郎

森鷗外の『独逸日記』とユリユウス・エクステル

美学者としての大西祝

大塚保治先生のこと

島村抱月と明治美学史

阿部次郎氏の『美学』に関連して

Ⅳ 近代日本文学研究

二葉亭四迷、国木田独步と川上眉山

二葉亭四迷とドブロリウボフ

島崎藤村と浪漫主義

168 162 150 149 138` 124 115 102 93 78 62 61

明治浪漫主義文学に於ける新詩社の位置

高山樗牛論

一 大西祝とその「社会主義の必要」

二 高山樗牛と社会主義

三 高山樗牛のニーチェ

石川啄木と自然主義

正岡子規の文学論

中村彝とエロシエンコ

芥川龍之介と葛西善蔵

山村暮鳥論

V 西洋文学の影響

西洋文学の影響

その意味一

272	272	271	257	244	237	224	212	206	200	195	195	183
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

その意味 二

その歴史

フロレンツ・明治時代の文学運動

VI 年 表

雑誌「文学界」「しがらみ草紙」文学評論年表

「文学界」

「しがらみ草紙」

明治・大正文学評論年表（単行書）

跋に代ふ

柳田 泉

後 書（初版）

追 記

解 説

小田切 秀雄

初出一覧

361 350 346 344 340 326 312 302 302 301 283 277 275

I

明治文学評論史

はしき

芸術家の創作活動にとって、理論のような灰色の存在はむしろ邪魔者である、という言葉はよく知れ渡っている。確かに、作品に対する個々の作家の親和にとってこの言葉は正しいであろう。けれども、ひとつの文学運動が、ことにその前に存在する文学運動を押しつけて、文学史のうちにその新鮮な相貌をあらわすときに、そのような新しい文学運動が成立する歴史的な必要と性格——世界観——を、いち早く作品と並んで、或いはそれと前後して、理論、批評として提出するときの役割は、作品と理論とが同一の胎内から生れた双生児たることを示している。そしてこの際に両者にとっての幸福と不幸もそこにかかっている。というのは、両者とも、その成立と崩壊との同一の宿命をその生誕とともに刻印されているからである。

一般にいわれているように、明治文学史が全般的に見てブルジョア・レアリズムの深化と発展という基線を持っているとすれば、明治の文学評論史も、またそのような態度、方法の深化と発展——自然科学の方法を、マンチェスター的実証主義的意欲を、芸術のうちに持ちこんだ自然主義へ————といふことができる。そして、このようなレアリズムを、その当時にあつては全く驚嘆すべき包括さをもつて宣言したのは、明治一八年、坪内逍遙の『小説神髓』であつた。そして、それが自然主義へと到達するためには、浪漫主義的振蕩を経ねばならなかつた。けれども、わが国に於ける浪漫主義は、自由民権時代の

ブルジョア自由主義の放棄という政治的性格に特質づけられることによって、徳富蘇峰の所謂、冷笑の時期につづく反動のもとに、いわば否定的な浪漫主義文学たらざるを得なかった。文学評論の側面からのみいえば、北村透谷、田岡嶺雲、高山樗牛等の役割がそれにあたる。自然主義文学に於いて、ブルジョアジーは、芸術を自分のものとするこがてきた。と同時に、それはわが国に於けるブルジョア支配の形態に相応して、その意欲の稀薄さを作品の上にも理論の上にもあらわさざるを得なかった。けれども前記のような浪漫主義の発展のために、反語的に言えは、小栗風葉の言葉を引用するまでもなく、未曾有の文学革命であった。「明治四十年から四十二、三年にわたる間の自然主義運動の猛烈であつたことは今更ここにそれをくり返すまでもない」(田山花袋『近代の小説』。四三、四年頃から、その解体と分散の徴候は明らかとなりつつある。

私達が対象とする期間の主要な文学的潮流を簡単に言えは以上のようにあるか、そこに、例えば石川啄木のように、ブルジョア・レアリスムの展望を超えて、市民階級とともに生れたプロレタリアートの意欲へと近づく群をそれらの影に見ることができる。

また、一般に文学評論とか文学批評とかいう場合に、より直接に作品自身と関係するように使用されており、その場合に、その基礎をなしている文学論(美学)乃至世界観は予想せしめるにとどまる場合が多い。従って、ひとつの文学評論の歴史的な性格を判然とさせるためには、後者への理論的整理に傾かざるを得ないであろう。と同時に、文学評論の姿をより具体的な姿にとどめるためには、それが対象とした作品そのものが絶えず念頭に置かれざるを得ない。一般にいわれている文学評論の位置をかりに以

上のようにきめて、できるだけ両者への振幅を広く努めながら与えられた場所で明治の文学評論の歴史
的叙述をしたいと思う。

坪内逍遙の『小説神髓』とその周囲

近代日本文学史に最初のレアリスム変革の理論的烽火をあげたのは、坪内逍遙の『小説神髓』であった。私の文学評論の歴史的叙述もここから始めたいと思う。勿論、このようなものが突然に出現するというようなことはない。明治維新の変革に続いて、外国資本主義の生産様式の移植は当面の問題であったけれども、その波紋は明治一〇年頃から文学の領域にも及び、殊に一四、五年頃から自由民権運動の所謂政治小説の展開となるに至っている。そして、主として自由党系の海外文学の移植による刺戟と改進黨系の創作的実験との反省は、漸く近代文学への予感に形を与えるに至りつつあったということがてきよう。^{*1}坪内逍遙が『小説神髓』（二八年三月、東京稗史出版社から上巻、翌年五月、上下二巻、松月堂から出版）として、このような近代文学への予感に決定的な姿を与えたのは明治一八年であった。勿論『小説神髓』のうちに流れこんだものとして、その他に、この期に至る文学理論の成長とか、逍遙が『小説神髓』のために準備したもの等が挙げられる。^{*2}この期に至るまでに出版された文学理論に関するものとしては、西周が「明六雜誌」（七年二月）に紹介した文学概論の縮図を始めとして、^{*3}チェンバー兄弟によって刊行された百科全書の一節の訳、菊池大麓訳『修辭及華文』^{*4}（二二年五月、文部省）、フェノロサの『美術真説』

(一五年一〇月、竜池会蔵版)、また中江篤介訳『維氏美学』(上巻は一六年一月、下巻は翌年三月、文部省)等があり、殊にフェノロサのその啓蒙的役割は高く評価されねはならない性質を持っているが、それらに触れず、直ちに『小説神髓』に向おう。『小説神髓』が、わが国最初の文学革命に対して答えた点は、まず第一に封建的文学観に対して、市民的——どのような市民的内容であるかは後述するとして——文学観を置き、従つてまたそのような市民的内容を盛るに最も相応した小説のジャンルの優位(上巻「小説総論」、「小説の変遷」、近代文学の創作方法としての写実を主張している(ことに「小説の主眼」等々であらうと思う。すべての文学革命の脊髄をなしている言語革命に対しては、何ら答うところなかったといつてよい。

市民的内容、市民的真理は、「ありの儘を写す」ところの模写、写実の方法によつて把むことがてきる。そしてこのように芸術的に把握された「真に迫らしむる」、「真を穿つ」ところの市民的真理と、『小説神髓』が冒頭に拒否した文学の功利的側面とは、素朴ではあるが、弁証法的に提出されている。例えば、模写小説は、「あながち奨誡の意を寓して脚色を曲ぐることをなさず、ひたすら世間にあるべきやうなる情態をのみ描きいだして、さながらの真物のごとく見えしむることを望み、力めて天然の富麗をうつし、自然の跌宕を描き読者をしてしらすしらず其仮作界に遊はしめて、而して隠妙不可思議なる此人生の大機関をば察らしむるものなり、されば模写主意の小説には、求めずして諷刺諷諭の法そなはり、暗に人を教化するの力あり」のうちに^{*5}も見られる。勿論、弁証法といつても、福沢諭吉に見られるような限界を担っていることはいうまでもないけれども、^{*6}私がこつてこの側面をととさらにと

り出したのは、この逍遙の確信が、後年「新楽劇論」（三七年）、ページェント時代として、広義の教育者として発展する重要な契機となっているものであり、彼の生涯の理解の主要な鍵と思われるからである。「人間は情慾の動物^{*7}」であるから、勸善懲惡の小説のように機械人形を示すのであっては眞實を描く（近代的市民的）小説と呼ぶことはできない。このようにして、封建的道德感から解放され、新しく「心理学の道理に基^{*8}づ」いた人間を描くために、ありのままとして提出された創作方法、写真主義は、これを批評の態度、方法につけて言えば（『小説神髓』のうちに語られてあるように）、最も一般的な意味で心理学的、実証主義的方法ということができる。そして、それは、次に森鷗外との論争の動機をなす論文「小説三派」、「梓神子」（二四年）等のうちに発展し、次に高山樗牛との論争の動機をなす「歴史画論」（三〇—三三年）のうちに発展している。

例えば、「梓神子」の最後に、次のように自己の批評的態度を述べている。

「批評とは褒貶の謂にあらず、此間竹のや主人の生霊が、評とは言^{ことたひら}平なりといふ意なりといひしが、確言なり。漢文家の評の如く、褒むるも評の本旨にあらねば、瑕はかりをほぢくるも^{からす}烏文人の惡銭なり。文章脚色のみを批するも評判の一斑にして、小説は性質の顯著普通なるを要す、といふも一斑なり。ホーマーの規に外づれたるを叙事詩にあらずといふも偏にして、シェイクスピアの作を標準とするも偏なり、批評は須らく其の作の本旨の所在を發揮することをもて専とすべし。『源氏物語』を評せんとならば、紫式部の理想と技術とを發明して、彼の本体を明かにせよ。馬琴を近松を評するも、またまさに斯くの如くすべし。褒貶優劣はせずもあれ。近頃モールトンが唱ふる科学的批評の旨も此意の外な

らず。演繹的専断的批評の世は近かんとす。帰納的批評の時近づけり。想の詩即ちドラマを評するに
は、没理想の評即ち帰納批判を正当とす。^{*9}更に、ここに既に見えている没理想は、偶々マクベス註釈
に当り註釈者の態度を基礎づけるシェイクスピア觀につけて發展されている（二五年一月『マクベス評
釈』の緒言）。逍遙によれば、シェイクスピアの傑作は「甚だ自然に似」^{*10}ており、「殆ど万般の理想をも容
れて余りあるに似たり、是れ最も造化の本性に似」、その場合に「唯々其の理想をほめて、大哲学者の
如く高しとは信じ難し、むしろ其の没理想なるをたふべきのみ」と没理想を發展し、加うるに同時に
「早稲田文学」の時文評論欄を設けるに際し、記述を先にする事が述べられた（論文「我にあらずして
汝にあり」参照）。

坪内逍遙の『小説神髓』以後の、我々の問題としている側面の發展は大体に以上のようにあり、そこ
に見られるように、絶えず封建的道德の觀念論的演繹的批評に対して、素朴な心理学的批評を對置し
ている。けれども、『小説神髓』の前後より続くわが国の反動期の下で、『小説神髓』の立場を破壊的批
評として退け（結構的批評^{*11}）、無撰撰に讓歩する態度として没理想、記述を見ると逍遙自身の市民的
意識の位置と角度の曖昧さ——政治的に言へば、改進黨的——を見逃すことはできないであろう。この
ことは、硯友社の封建的殘滓をもつ写真主義との親しい關係、従つてわが国の浪漫主義文学が逍遙と結
びつかかなかつた不名誉などによつても明らかであろう。

であるから、次に登場する森鷗外が真に逍遙の發展としてあらわれるならば、かかる逍遙の本質的な
欠除を發展さすべきであらう。同時代人としての二葉亭四迷、中江篤介等にこのことを期待することは

てきないであろうか。そして、二葉亭四迷の翻訳と創作、また中江篤介の文学についての断片を見ると、^{*12} 逍遙よりはより根底的なるものを感じるといふ理由によって、明治初期のシトワイヤンの反映を僅かに懐しむのは私の感傷のみであろうか。取り残された自由党左派の流れは、その文学的反映として北村透谷のうちに、また国木田独歩、高安月郊のうちに現われ、後に述べるように、わが国浪漫主義文学のうちに清新な革命的血液を混じた。

それはともかくとして、坪内逍遙の『小説神髓』に於けるありのままとしての現実主義的態度がひとつの革命的基石であることはいうまでもない。高田半峰の「演劇論」^{*13}は、『小説神髓』をそのままに演劇に移したものであった。また、逍遙が『小説神髓』の言わば創作的見本として書いた『一読三嘆当世書生氣質』の高田半峰の評は、近代文学批評の最初のものといわれるものであり、^{*14} 初めに『小説神髓』と同一の文学論を述べて従来の文学論による非難に答えつつ、『書生氣質』のうちに多分にあらわれている戯作者的要素（人物の類型化と、フォーマル、ウィットというよりは地口口調の産出、芸術的パトスの欠除）を西洋小説と比較批評した半峰のすぐれた理解を示したものであった。^{*15}と同時に、近代文学理論の餘々たる成長を示しているものと見ていいであろう。

そして、この時期から、より詳細に言えば、逍遙が『小説神髓』以後の反動期につれて一層その無撰択な譲歩を余儀なくされた頃から、逍遙に於ける欠除を償うべき浪漫主義的思潮が現われ始めたということが出来るであろう。巖本善治、大西祝、徳富蘇峰等の一系列の人達は、このような浪漫主義思潮の先駆的な役割をなしたといふことができる。巖本善治は「女学雑誌」^{*16}の主宰者として、大西祝は、元良

勇次郎と共にわが国に於ける心理学的美学の成立者として、また浪漫主義の哲学ということもできる哲学体系の所有者として、また徳富蘇峰は、いうまでもなく、藩閥官僚と対抗し産業ブルジョアジーの広汎な関心を代弁し兼ねて革命思想を育成するに力あった民友社の主宰者として、芸術の領域にも絶えず適切な芸術政策の意味の芸術論を提供した人として記憶すべきであらう。^{*17}

*1 柳田泉「日本文学に及ぼした西洋文学の影響」(岩波講座『世界文学』)その他同氏の今迄に発表されたこの期についての論文による。ここに至る明治初期の文学論は非常に重要であり興味あるにちがいないけれども、それらに就いての私の知識は全くない。文学論と同時に、そして恐らくは、より寧ろ、この期の政治的性格こそが、その後の浪漫主義、従ってまた自然主義の性格を一般的に規定している点で重要であると思う。

*2 木村毅著『明治文学展望』(昭和三年六月、改造社)のうち「小説神髓小論」参照。

*3 木村毅の前掲書のうち「明六雑誌の文学記事」参照。

*4 これ及びフェノロサの『美術真説』は、明治文化全集、第二二巻に収録。

*5 『逍遙選集』、別冊第三、五五頁、春陽堂文庫四三頁。

*6 例えば『福沢論吉全集』第四卷、四八八、四八九頁。

*7 『逍遙選集』、別冊第三、四二頁、春陽堂文庫三一頁。

*8 同別冊第三、四三頁、文庫三二頁。

*9 同別冊第三、一八〇、一八三頁。

*10 同別冊第三、一六三頁以下。

*11 『小羊漫言』(明治二六年六月、有斐閣)のうち。この論文は、維新前より二四年に至る文学批評の方法を歴史的に述べている興味ある論文である。

*12 例えば、『文学趣味論の応援』(「国民之友」第二卷第一七号)、「文学の妙は社会の極致を穿つにあり」(同第二卷第一八号)。

*13 「中央学術雑誌」第三二号(一九九年七月一〇日)。

*14 例えば、長谷川天溪「思想界の名著」(雑誌「文章世界」四〇年五月一五日発行)同所で、文学史研究の嚆矢として末松博士の『支那文学略史』を挙げている。

*15 『当世書生気質』(『明治文学名著全集』一、東京堂)に収録。